Slave's yammer―引かれ者の小唄―

KOF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｌａｖｅ'ｓ　ｙａｍｍｅｒ―引かれ者の小唄―

【Ｎコード】
Ｎ１１９５ＢＡ

【作者名】
ＫＯＦ

【あらすじ】
異世界に人違いでその本人と召喚された。なめてやがるふざけてやがる狂ってやがる。なに？　魔族の本拠地に送還魔法が伝わっている？――ほほぅ。ようするに、帰るためには魔王を倒さないといけないと。――なめんなよ白髪少女。「不可能だろうが不可解だろうが、僕の名前は瀬崎夜陽。あらゆる小細工を小賢しく弄して、悪魔も逃げだす悪知恵とちょっとばかしの悪戯心を持った、不可能も可能にする方程式だ」

第一解：人違い＋異世界召喚＝いい迷惑（前書き）

へろ、まいねむいず、けーおーえぇふ！
あいきゃんすぴーくいんぐりっしゅ、べりーうぇる！
わっと？　ぜん、いんぐりっしゅとぉと？

おーまいごっど！？

ぜん、ぷりぃずりーど！

第一解：人違い＋異世界召喚＝いい迷惑

今日もだるい冬期補習が終わった後、十七歳少年、瀬崎夜陽（せざきよるひ）はだるだると商店街を歩いていた。

「……不毛だ。なんて不毛な日々なんだ。意味が無い無意味だ、矜持が無い無秩序だ、為になら無い無為だ――なんで、こんなにも面白くないんだ」

当たり前だった。

クリスマス当日に、なにが嬉しくて恋人たちがいちゃつく商店街を、たったの一人で漫画を購入した袋を抱えて歩かなければならないのか。そして、その恋人たちは彼のことは全く目に入っていない様子で――逆に揶揄された方がいいような、気がする。

瀬崎夜陽、十七歳高校二年生。

あだ名は狐。人の皮を被った悪魔。悪魔すら凌駕する悪知恵。不可能を可能にする方程式。良品を超える不良品。狡猾王。戦塵軍塵（せんじんくんしゅ）。ｅｔｃ……。

顔は、中の上。黒髪黒目で、身長は百七十後半の痩せ型。家族構成は、両親に妹が一人。

――天は僕を見放されている……っ！

「……いや、僕が天を見限っている？」

神様を信じていないからなのだろうか？　と首を捻りながら、夜

陽は商店街を歩いていると――空間が歪んだ。

いや、空間が歪んだ、という表現を使っていいのか分からない。そもそも、空間が歪んでいる光景など、現実問題見たことないからだ。二十一世紀も終わるというこの時期に、そんな空間を歪める技術があるとすれば、それはアメリカのＮＡＳＡの秘密技術ぐらいのものだろうし、ＮＡＳＡですらそんな技術があるのならばロシアとの冷戦時代にその技術を使用しているはずだ。

だが――空間が歪んだ、という表現を使わなければならないのだろう。

ぐにゃあ、という表現を物体が変形する以外で使うとは思わなかった夜陽。目の前でぐにゃぐにゃと歪むそれは、見ていて生理的嫌悪を掻き立てられる、というより不思議と惹きつけられるような。

「な、なんだ、なんだ？」

夜陽は、こういうとき手を伸ばすのは危険なことだということを分かっていながら、やはり好奇心に負けて、手を歪みに向けて伸ばす。

――ぱしっ、と。

心臓に目の紋章が刻まれ、蛇が巻きついている刺青の入った人の手に、掴まれる。

『あなたが――ヒジリヅカ・コウキ様ですね？』

――間違いだった。

それも、極限的な間違いだった。はっきり言って、間違っていい人間とそうでない人間がいると思う。
その中でも、聖塚光輝と瀬崎夜陽を間違えるということは、日本とブラジルを間違えるくらい常識はずれなことだった。こんなこと、夜陽が通う学校の人間が聞いたら憤慨するどころではなく、きっと世界を滅ぼしに動き出す。

腹黒（ヒール）夜陽と聖人（ヒーロー）光輝。

そんなふうに、対比される存在である。

世の中に主人公がいるとすれば、それは間違いなく聖塚光輝のような人間で、瀬崎夜陽の役回りと言えば、そんな主人公に脚光を浴びせるための、敵方の黒幕であるボスの補佐策士である。眼鏡をくいくしやっている間に、主人公の聖なる聖剣で袈裟懸けにばっさりやられるキャラである。

――だが、友達でもあるのだから性質が悪い。

とにかく、この歪みから伸びている手の方は、おそらく今世紀で最大の過ちを犯している。
だからここは、丁重にお帰りいただこうと思い、夜陽はその腕を叩き折ろうと掴まれていない腕を大きく振りかぶり、そして――ぱしっ、と。再び手を掴まれた。

「よっ、夜陽。こんなクリスマスに一人か？　一緒だな。俺も彼女がいないんだぜ」

――彼女がいないのと、彼女が出来ないのは天と地ほども差があるんだぜ、というツッコミはできなかった。

「ちょ、手を離せ光輝！　なんだかお前はとてつもない過ちを今犯している！！」

茶髪黒目の快活な笑みを浮かべる少年は、暴れる夜陽を意に介さない。

「いや、それを言うならお前こそ何してんだ……ん？」

光輝は、夜陽の前方を綺麗な黒真珠（くろめ）で覗き込む。

――そこから伸びる手を見て、呆然とした。

「……黒魔術に手を出したとは……」

「違う！　とにかくさっさとこの手を叩き折らないとお前も面倒事に巻き込まれッ！？」

ぐん、と。

歪みから伸びている手から、その細腕からは考えられない力で引きずり込まれる。

「う、うおおおおおおおお！？」

「夜陽ッ！！」

「いだいいだいいだいッ！？　ちょ、僕の身体が、股裂きの刑にあったかのごとく真っ二つに引き裂かれてしまう！！　どっちか力を弱めて、ね？　お願い！！」

「え、じゃあ俺が」

「お前は駄目だ！！」

『早く、こちらにいらしてください』

「お前はヤメロ！！」

というか、この状況に何故誰一人気付かないのだろうか、という疑問がふと浮かんできた。ここまでの大騒ぎならば、普通誰かが近寄ってきてもおかしいはずだし、現に光輝が異変を察知して近づいてきたではないか。

ほんの少しだけよそ見をして、意識を外に向けると――空間の歪みが二人を包んでいた。

「なんだよ、これ……っ！？」

「夜陽！！」

「ふぬぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐッ！！」

無理だった。

まるで、自動車と綱引きをしているみたいだ。

がりがりと、アスファルトを少しずつ削りながら、歪みへと引きずりこまれていく。

「こ、光輝！　放せ！！」

「ムリィ！　夜陽がいなくなったら楽しくねーもんッ！？」

「ちょ、腐女子に媚びるな！　そんなことしなくてもお前の人気は

留まることを知らないからッ！？　ぬおおぉ」

『――いらっしゃいませ、ヒジリヅカ・コウキ様』

――――だから、人違い……。

そんなか細い呟きとともに、瀬崎夜陽と聖塚光輝は、この世界から姿を消した。

＝＝◆◆◆＝＝

そこは、薄暗くて湿気が多くて若干狭くて――陰気なところだった。中央には淡青色に輝く円形の模様が描かれていて、部屋の壁付近には偉ぶった中世ヨーロッパのような服装をした人たちが立っていた。

その、円形の模様――恐らく、魔法陣と思われる中心には、白い修道服に紅い線が奔っているものを着た、白髪灰眼の少女が魔法陣に超物理的に手を突っ込んで蠢かせていた。

「……まだなのですか、エリヤ様」

黒髪をオールバックにして神経質そうな細い眼鏡をかけた男性が、静寂を打ち破って中央に居座る少女に話しかける。

「……お待ちください、宰相。なにか、重いのです」

「……分かっているのでしょうね。これはこの国――しいては世界（ヴァース）

のために不可欠の儀式。それを二度も失敗したというのなら――」

「黙っていなさい、宰相」

今までにない強い口調で言い、エリヤは宰相を睨みつける。

「神殿と政府は切っても切れぬ存在ではありますが、そこには絶対不可侵の領域があるのぞご存知でしょう。ならば――賢明な判断を」

「……ふん」

宰相は鬱陶しそうに鼻を鳴らすと、機械的に前だけを見た。

（く、なんで、こんなにも重いの……？）

だが、それもあと少しのはずだ。

どうやら、今回の勇者は体重が百キロを超える巨漢らしい。

ならば――強く逞しい勇者になることだろう。

「……来ます。皆様、少々閃光が迸りますので、お目を閉じに」

エリヤは、一層の力を腕に込める。

一瞬後、全ての影が消え去る強烈な閃光が小さな部屋に充満した。

＝＝◆◆◆＝＝

強烈な頭痛がする。悲痛な吐き気がする。無知な気がする。

――最後のは余計だったか。

「っつぅ。なんなんだよ、ったくもう」

床が冷たい。冷たい床。――なんで、床の冷温が分かるんだ？

それは多分、自分が大理石の床にうつ伏せになっているからに違いなかった。

うつ伏せになったまま、顔を横に向けると、現代日本ではおよそ一部例外を除く場所以外では見られないような鋼鉄の脚防具（レギンス）が飛び込んできた。

状況を判断できないまま、跳ねるように飛び起きる。

『おおぉ……』

周囲の全方向からざわめきが起る。

必死で状況を理解しようとするが、夜陽の常識が理解しようとするのを頑なに拒否をする。

（な、なんだ……僕は、甲冑マニア共に拉致られたってのか？）

いや――違う。

思い出せば、いい。ここに来る前に、何があったのかを。

――空間の歪みから、奇っ怪な紋章の入った腕に掴まれて、光輝と一緒に引きずり込まれた後、意識を失った。

……バネのように飛び起きた。

「なんのファンタジーだよッ！」

「ファンタジーではありませんよ、勇者様。私達の世界では切実な現実問題なのです」

夜陽は目の前に佇むもの静かな白髪少女から二歩ほど飛び退いた。

が、何かにつまずき後頭部を堅い大理石にぶつけて、視界に星が回った。

っていうか、光輝だった。

「この馬鹿光輝！　さっさと起きろ！！」

「……コウキ？」

目をいぶかしませる白髪少女に冷や汗を流しながら、とにかく夜陽は光輝を起こすことに専念する。

気絶している人間に強い刺激を与えてはいけない、なんてことはもうどうでもいいことに変わっていた。

「起きろ、起きるんだ光輝！　そしてお前の持つ主人公パワーで僕もろとも助けてはくれまいか！　っていうかさっさと起きろやなに幸せそうな笑顔浮かべてんだ！！」

「う、女の子が、くる……く、苦しいのに、幸せ、だ……」

「てめこの野郎！　今お前と命張ったドリフしてる暇なんてないんだよ！！　どちらかというとお前の大好きな人助け、それもお前の可愛い幼馴染である夜陽くんがピンチなんだからさっさと起きろやボケェェェェェェェエエエエエエッ！？」

「おごッ！？」

夜陽の平手打ちが光輝の左頬にクリーンヒットした。これでも、学校でこんなことをやればファンクラブの会員筆頭十人に血祭りにあげられる。だから、勇気を振り絞っての行動だったのだ。
光輝が、「なにすんだよもー……」と頬をさすりながらゆっくりと立ち上がる。
そして、瞠目して固まった。

「……あのぉ？」

「……えっと、あの、どういうこと？」

光輝も白髪少女も、困惑顔になる。
とりあえず光輝が、「目擦っても良いですか？」と意味の分からない質問をして、「えっと、はい」と白髪少女が答える。

こしこし――じー――こしこし、じー、こしこしじーこしこしじー、こしこしこしこしこしこしこしこしこしこしこしこしじーじーじー――こしこし。

「……夜陽、現状を説明してくれないか」

「……光輝、現状を打破してくれないか」

二人はとりあえず見つめ合い――、

「「なんじゃごりゃあああああああああああああああああああああああああああッ！？」」

とりあえず、叫んだ。

＝＝◆◆◆＝＝

「ということは――こちらの茶髪の方がヒジリヅカ・コウキ様で、こちらの黒髪の方がコウキ様の従者と」

「いや、夜陽は従者じゃなくって俺の」

「ああ、そうそう。僕は光輝様の従者です」

「夜陽ッ！？」

夜陽は不敵な笑みを浮かべる。

そして、光輝の耳元に顔を寄せて、光輝にしか聞こえないように囁いた。

「（カマかけてんだから、お前はお前の好きなようにやってろ）」

「（はぁ！？　カマって）」

ようするに、自分に対する関心を消して、現状を理解するために、光輝を囮に使っているわけだ。

「コウキ様。このレーガル王国を御救い頂けませんか？」

「はぁ！？」

夜陽は内心そういうタイプのソレか、と誰にも気づかれないように小さく笑った。

レーガル、というのは現時点の世界地図には載っていない。ならば、地球外、もしくは別次元の存在と考える方が無難だろう。
夜陽がこんな荒唐無稽な思考に至ったのには、もちろんソレが立証されているからにすぎない。

空間の歪み、という時点で既にアウトだ。それで意気地になって信じないほど、夜陽は頭が固くは無かった。

「精霊の儀式により、コウキ様の御名が出たのです。それで、召喚の儀式により半年前に召喚しようとしたのですが――力不足で失敗してしまって、今回は念を込めて直に探ってみましたら、見事成功した次第です」

「は、はあ……え？　っていうことは、異世界？」

「え？　そんなはずは……基本的に、この世界から召喚されるはずでして」

基本的、ということは何度もコレをやっているというわけか。
夜陽は、この二人のこの先のやり取りは大体予想できるので、周囲に視線をこっそりと忍ばせ始めた。

（……あの神経質そうな眼鏡は、僕ポジかな？　あの派手な女の人は、王妃か姫か……ああ、見劣りするけど隣のは王かな？　白髪少女と同じ様な人が一人。で、見るからに騎士団長っぽそうなのが、違う格好で三人。……、あの金髪で小太りなのは貴族か）

品定めしていく。
一番厄介そうなのは、やはり夜陽と同じポジションに居そうな神経質そうな眼鏡の男。

あとは全員面倒くさそうだ。

「そこ、そこの者」

「ん？　僕？」

「そうです、あなたです」

……僕に対してだけ態度違うぞおい、と心の中でツッコミをいれながら、夜陽は白髪の少女に向き直る。

「光輝様の従者なのでしょう？　ならば、横に突っ立っていないで膝をついたらどうです」

「あ、僕従者じゃない。さっきの嘘。騙された奴ざまあ」

「なッ！？」

「っていうかさ、あのとき光輝が通りかからなかったらあんたまた召喚失敗していたわけで……どんだけ力不足なんだよ」

「ぶ、無礼な！」

顔を真っ赤にする白髪の少女に、夜陽は余裕の笑みを零した。まわりの反応も含めて、だ。

「っていうかさ、何のための軍隊だよ。働けよ、引きこもりか、税金泥棒か」

「キッサマあああああああああああああああああああ！！」

「ふん……」

「ま、まあまあ」

騎士団長っぽい三人が。三者三様過ぎて逆に気持ちが悪かった。
そして、三人の呼び名が一時的に決まった。
激熱。男。
クール。女。
普通。男（？）

「お、おい、夜陽。刃物持ってる奴を刺激すんなって」

「そのスリルを楽しんで人をおちょくるのが楽しいんじゃないか。
まあ、今は殺されないだろうし」

クールの動向次第だが、激熱が斬りかかって来たとしても普通かクールが防ぐだろう。
それでも、今まであったどんな人間よりヤバい雰囲気を漂わせている空間で、殺気駄々漏れで、今にも泣きそうなのだが、頑張っていた。

「簡潔に行こう。僕たちを召喚した……年増さん？」

「エリヤです！　エリヤ・ルエド・ウラグニル！」

「エリヤさん。話しを察するに、魔王がどうやらこうやらでその魔王を倒してほしいわけでしょ？」

怒り心頭といった様子のエリヤを無視して、夜陽は不敵な笑みを

零す。

「あなたには頼みません！　コウキ様がいればそれでいいです！！」

「じゃあ僕を元の世界に還せよ。僕のこといらねえとかいっときながら、『還せません』なんてこたぁねえよなぁ？」

「そ、れは……っ」

やっぱりか、と予想が確信へと変わった。

やった本人というのは、大体無責任で、その後何かを言及されるとそれらしいことを並べて、少しの謝罪とともに若干の涙を浮かべて、懇願してくる。

「そ、それでも、私達の国は、いいえ世界は、魔王の侵攻により危機に瀕しているのです。……だ、だから、助けてはいただけないでしょうか？」

ここで、返事をするのは、光輝の役割。

いつも、夜陽は引き立て役だ。

――いや、その前に、今後の夜陽のモチベーションのために、聞いておかなければならないことがある。

「エリヤさん」

「なんですか」

少しふてたように返答するエリヤに、「苛めすぎたか」と苦笑いを零しながら、

「帰る方法、ある？」

「……魔族側には、送還魔法が伝わっているそうですが。それで、あなたを元の世界に返せるかどうかは」

「……そっか」

それもそうだ。本来ならばこの世界の住人を召喚するものであって、異世界の人間を召喚するものではないのだから。この世界の住人ならば、普通に歩いてでも帰れるのだから。

「ようするに、帰るためには魔王を倒さないといけないと」

「だな」

「別に、あなたは隅っこでガクガク震えていても良いですよ？　その間にコウキ様が解決するので」

「……は？　僕を誰だと思ってんだよ」

夜陽は――不遜にも、不敵に笑って、

「不可能だろうが不可解だろうが、僕の名前は瀬崎夜陽。あらゆる小細工を小賢しく弄して、悪魔も逃げだす悪知恵とちょっとばかしの悪戯心を持った、不可能も可能にする方程式だ」

――精一杯格好つけた。

第一解：人違い＋異世界召喚＝いい迷惑（後書き）

こんなふうに、ちょっとサド気味の主人公が頑張るお話しです。戦闘の方は――まあ、あまり期待はしない方が目のためです。

ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

第二解：学生×（悪戯心）？＝瀬崎夜陽（前書き）

ユーのハートは何シンキング？
セザキのハートはホワイトとブラックがストリーム！
ミーのハートはヤンデレがパンデミック！

では、リードどうぞ！

第二解：学生×（悪戯心）？＝瀬崎夜陽

「まーま、大変なこった」

夜陽は、勇者召喚のため開かれた祝宴で煌びやかな衣装を纏った貴族たちに囲まれる光輝を見ながら、厭らしい笑みを浮かべていた。先程から助けてくれ、みたいなサインを受けているが、ここは自分で切り抜けてもらう。

どちらが勇者らしいかといえば、それは絶対に光輝で、逆に夜陽のような存在は疎まれる。

そこが、つけこみどころだ。

光が強くなればなるほど、影はどんどん濃くなっていく。

その影に潜む隙も、いくらでも増えていく。

光輝はどう考えているかは知らないが――はっきり言って、勇者一人の力より、軍を有用に動かした方が戦力的にはデカいだろう。まあ、召喚されたついでに身体が少し動かしやすくなったりしているのだが、それでも長年命を懸けてきた騎士に追いつくことは至難の業だろう。

というか、夜陽では不可能だ。策を弄した程度では、一度ぐらいしか埋められない。

ならば――夜陽は直接戦うのではなく、どこか軍を動かす部署に入り込めばいい。

――軍師ポジション。

「セザキ殿」

「……クールさん？」

「……エマ・シェザードだ」

意外にも、この祝宴で夜陽に関わってくる人間がいた。
召喚されたときに、夜陽の挑発に乗らなかったクールな騎士団長っぽい女性である。蒼い髪を肩まで伸ばし、同じような深海のように深い青の瞳が、夜陽を見つめていた。

「その、そのエマさんが、僕にどんな御用件で？」

「私は、あなたを結構高く買っていますよ。あなたにとってはハプニングの中、冷静に状況判断をこなすどころか、あえて周囲を挑発して情報を得ていた、あなたのその姿勢をね」

「……」

クールなお姉さんは、ようするに知的で理性的なお姉さんだったわけである。
夜陽が周囲の状況分析を行うために光輝の従者だと言って自分からの注意を逸らしたのと同じように、このエマという女性もこちらのことを窺っていたわけである。

（まさか、光輝の魅了（セルフチャーム）から逃れられる女の人がいるなんてな……男でも、意識を惹きつけられるっていうのに）

「生憎ながら、私は面食いではないのでね」

……どうやら、読心術もそれなりに使えるようだった。

こういう人間は、敵に回すと厄介。こういう――強くて知的な人間は。

「セザキ殿は、あちらのユウシャ様とは違って、それなりの場数をくぐり抜けてきたようだ。私のような肉弾戦ではないにしろ――そうだな、情報戦を」

「……まあ、僕は光輝とは違って身体能力が高いわけでもないし、主人公補正が働いているわけでもないんでね。使えるものはなんでも使わないと、守りたいものも守れなかったものでして」

「あちらのユウシャ殿の話では、かなり平和な世界だったと聞いているんだが？」

「まあ、斬った張ったなんてことはないんですけど――傷つけられたくないものはありましてね、チンピラ共から守ったり、不良グループから狙われてるから助けるついでに壊滅させたり。ああ、一番ヤバかったのは暴力団と関わった妹を逃がすついでにフルボッコにしてやろうかと思ったんですけど、失敗して、間一髪組長の弱み掴んで脅しまくって手を引かせた挙句、警察にその情報に色々付け加えてタレこんだときだったですね」

だんだんと夜陽の目が遠くを見つめだした。

不良グループや暴力団というのが分からなくても、それなりの場数は踏んでいるんだろうということだけは分かったらしい。それも、ほとんど情報戦で。

「どんな弱みを？」

「僕が失敗して切羽詰まって相手の本拠地に潜り込んだ時偶然発見したものでね、幸運でしたよ。まあ、死体を隠してたわけですよ。あと、警察が情報操作して公に出なかったことですけど、刑事が殺されたことについて、ほほぅ、と来るようなことを話していたので、録音して、後は麻薬だとか写メったりして。まあ、良く分からないでしょうが、貴族の皆さんが横領しているのを見つけて、それで散々ゆすった挙句宰相にチクったってことと同じです」

嬉々として語る夜陽に、流石のエマも若干引いていた。

「あなたは――悪魔の生まれ変わりか？」

「人間だからこそ、人間が何をすれば怯むか知ってるんですよ。人間だからこそ、ね」

「だが、今回のあなたの相手は、魔族だが？」

「変わりませんよ。相手が鉄のような無感情だったなら幾分か手間取るでしょうけど、それはない。現にこの世界は魔王とやらに侵略されているから」

「……？」

「ようするに、僕が騙すのは――生物なら何でも持ってる、欲望ですよ」

「欲望？」

「まあ、あなたとはこれからも仲良くしておきたいから言いますけど――なにかをしたい、っていう感情は、つけ込むことが簡単な要素です。時にはそれを遮って苛立たせて、時にはそれを促すような形で誘導したり、ね」

欲望を道路と考えればいい。通行止めや一方通行、徐行や速度制限。この道が通れば速い、というのも交通法規上に定められたものでしかないのにもかかわらず、人は車を使って道路を最高の形で通っていると思っている。

それを使えば、交通量や事故発生件数など、かなりの精度でコントロールできるのだ。

「まあ、馬鹿にはあんまり通用しないんですけど」

「何故？　馬鹿の方が御しやすそうですが」

「馬鹿っていうのは、そういうのを完全に無視するんですよ。堂々とね。頭のイイ奴なら姑息な手を使ってしようとするんですけど、馬鹿はリスクを恐れませんから」

――その代表例が光輝なんだよなあ、と夜陽はうんざりしながら心の中で呟く。

思えば、光輝にはその手の策は一切通用しなかった。というより、徹頭徹尾、策を弄されているということにさえ気付かなかった。

だからだろうか、友達でいるのは。敵に回すのが怖いから――。

（いや、友達でいるのに、理由は要らない、か）

「まあ、そのレールの上を走らせるのが、結構難しいんですけど」

「……セザキ殿は、元の世界ではどのような職業で？　高名な軍師かなにかと思うのだが」

夜陽は口に運んでいたフライドポテトのようなものをピタリと止めて、宙に視線を躍らせる。

そして、思いついたように厭らしい笑みを浮かべると、

「学生ですよ。ちょっと人間に悪戯するのが好きな、ね」

第二解：学生×（悪戯心）？＝瀬崎夜陽（後書き）

今回は夜陽くんの腹の内を見せました。
味方にしておくべき人も見つけたようですし、これからどうなることやら。
第一章の終わりはもう構想で来てるんですけどね。あとは中身が。
では、ご感想ご批判ご指摘、お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1195ba/

Slave's yammer―引かれ者の小唄―

2012年1月4日01時48分発行